

《論文》

神田佐野文庫所蔵

宇田川榕菴・辻蘭室筆「彩色ジャワ植物図譜」 について

松田 清・益満まを

はじめに

2017年10月12日、高崎市の古書店主、名雲純一氏が東京都内の古書市場で、1冊の写本を入手された。翌日、著者のひとり松田は名雲氏からの通報とともに、その調査の依頼を受けた。送られてきた写真データをみると、無署名、無題の江戸時代の図譜で、植物図130図、鳥図4図から成っていた。植物図105図にはアルファベットで植物の現地名が書き込まれ、そのうち7図について、蘭文の解説とその和訳が綴じ込まれていた（本稿 p.26、図41参照）。

蘭文（図 a）は一見して、京都蘭学の開拓者辻蘭室（1756～1836）の特徴ある筆跡と判明した。著者らは両名とも京都大学附属図書館所蔵「辻蘭室文書」⁽¹⁾によって、蘭室の蘭文筆跡を見慣れていたからである。漢字平仮名交じりの和訳も、益満の指摘により蘭室の丁寧な筆跡であることが分かった。

図 b に掲げた辻蘭室筆跡は、スウェーデンの植物学者 C.P. ツェンペリー（1743～1828）が長崎滞在中、1776年 8 月 29 日付けで門人の阿蘭陀通詞茂節右衛門に与えた、博物学・植物学・薬学・解剖学・医学修業証書の写しである。

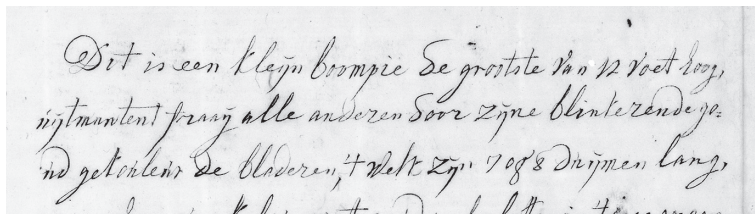


図 a 辻蘭室筆跡（神田佐野文庫所蔵）©Kanda Sano Library, KUIS.

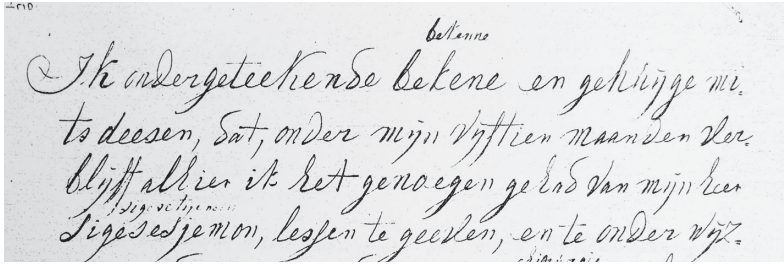


図 b 辻蘭室筆跡（京都大学附属図書館所蔵辻蘭室文書）

問題の写本の蘭文和訳は抄訳であるが、格調の高い訳文である。そこには、成立事情にかかわる以下の記述が認められた（下線は引用者）。

「予爪哇国ポイテンゾルグといへる所に於て此樹を始めて見たり則爰に図するもの也」

「大樹なり予爪哇国ポンデユクキと云へる所民家の旁に此樹あるを見たり則其一枝を採りて画図するものなり」

「曆数一千七百八十六年十月十四日爪哇国ポンデユクキといへる所の山址に於て此樹の大なるものを見たり」⁽²⁾

これらの記述により、「予」すなわち図譜の原著者を当初、1786年10月頃にジャワに滞在し、同年10月14日に Pondukje⁽³⁾を訪れた可能性のある博物学的素養のある人物で、かつ日本と関係の深い人物と想定し、出島医師アルノルド・ステュツェル（A. Stützer）の可能性を追求した。ステュツェルはツェンペリーの門人であり、天明8年3月（1788年4月）、商館長ファン・レーデ・トット・デ・パルケレルとともに参府し、大槻玄沢ら江戸の蘭学者から、その博物学的素養（「楮鞭の技」）を讃えられた人物であり、玄沢はサイの歯の標本を贈られ、博物標本の交換を約束するなど交流を深めたからである⁽⁴⁾。

しかしながら、ウブサラ大学図書館所蔵ツェンペリー文書およびステュツェルの伝記に詳しい、旧知の同大学名誉教授マリー・クリスチーナ・スキュンケ女史⁽⁵⁾から、ステュツェルによる植物画の伝存をこれまで聞かないこと、ツェンペリー文書における彼の書簡はスウェーデン語やドイツ語で書かれ、オランダ語の文章は未見であること、たしかに1786年10月にジャワに滞在し、しばしばサイの狩猟をしながら旅行したが、その行程が一致しないこと⁽⁶⁾

を、指摘された。

ついで、インドネシアをフィールドにしている京都大学博物館の永益英敏教授（植物分類学）から、*Flora Malesiana*, vol. 1: 387-389 (1950) の記載により、1786年10月頃にジャワに滞在したスペイン人植物学者フランシスコ・ノローニャ (Francisco Noroña, c.1748-1788) の可能性がある、との示唆を受けた。すなわち、ノローニャは1786年4月15日にバタヴィアに到着し、ステュツェルと会い、9月5日から旅行にでかけ、同8日～28日にボイテンゾルフ (Buitenzorg) を訪問。西ジャワ各地を訪れた後、12月頃にバタヴィアに戻っていたのである⁽⁷⁾。また、同記載により、ノローニャによる植物図譜の在欧写本として、ロンドン写本 (Natural History Museum、略称 BNHM 所蔵) とパリ写本 (Muséum national d'histoire naturelle、略称 MNHN 所蔵) およびベルリン写本の3種が知られていることが分かった⁽⁸⁾。

以上の知見をもとに、10月20日、松田は名雲書店において、図譜の原本を直接調査し、図譜を『彩色ジャワ植物図譜』（以下、『図譜』と略す）と名付けた。次に、永益教授および山階鳥類研究所自然誌研究室室長山崎剛史氏の協力を得て、10月26日から、『図譜』の本格的調査を始めた。

まず、パリ写本とロンドン写本の画像データ入手が喫緊の課題となったが、幸いにも、パリ写本は旧知のフランス国立自然史博物館名誉教授ジョルジュ・メリエ (Georges Métaillié) 氏から、11月3日に画像データが届いた。ロンドン写本は、たまたまロンドンの自然史博物館で江戸時代の日本産魚類標本を調査中の滝川祐子氏 (香川大学農学部協力研究員) のご尽力により、博物館の許可を迅速に得ることができ、滝川氏から画像データを受け取ることができた。同じ11月3日のことだった。まさに奇遇というほかない。

こうして予想外に早く利用可能となったパリ、ロンドン両者本の画像データと比較した結果、『図譜』の植物図105図はロンドン写本と近親性が高いことが判明した。また、『図譜』の植物現地名の筆跡と植物図の特徴から、蘭学者宇田川榕菴の模写であることが分かった。榕菴は文政元年 (1818) 6月、京都に滞在中に、辻蘭室と会った可能性が高いと推定できた。これらの調査結果を踏まえた『図譜』発見の新聞報道 (2017年12月17日)⁽⁹⁾を経て、『図譜』は関係者のご高配により、2018年2月に神田外語大学神田佐野文庫に収蔵された⁽¹⁰⁾。

一方、『図譜』は享保年間から慶応年間まで、代々、宮中の内豎兼主鈴をつ

とめた地下官人渡邊家に伝来したものであった。そこで、『図譜』の渡邊家伝来の謎を解くべく、著者らは名雲純一氏のはからいで、2018年3月、渡邊家文書・蔵書を集中的に調査することができた。

本稿では以下、これまでの調査結果をまとめる形で、まず、『図譜』の書誌的考察（第1章）、ロンドン写本、パリ写本との比較（第2章）を行い、ついで、辻蘭室筆蘭文解説の翻刻および逐語訳を提示し（第3章）、最後に、成立時期と伝来経路について仮説を述べることにする。

第1章 書誌的考察

書誌

左袋綴じ写本、1冊。縦313mm、横222mm、厚さ約20mm。綴じは左中央に紙縫りで一箇所のみ（図1）。共表紙を含めて全79丁。無題。表紙に軽微な虫損があるものの、保存状態はよい。本文料紙77丁は雲母引き高級和紙である。

柿渋を施した紙帙に収められており、帙裏に蔵書印を摸して、「五□□」（図2）の三文字が墨書されている。2字目の漢字は「ヨ」の下に「寸」と解すれば、「尋^{ひら}」の略字である。3字目も同様の略字と解釈すれば「庵」と読むことができる。「五尋庵」の墨書は、『図譜』の含まれていた渡邊家文書・蔵書を調査したが、発見できなかった。

表紙を除いた残りの78丁に、植物図130図と鳥図4図が描かれている。図は裏表紙見返しの線描の植物図1図をのぞき、すべて彩色図である。彩色植物図

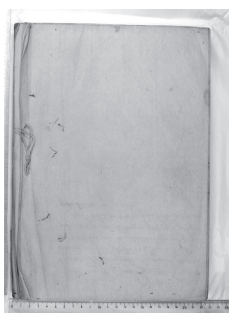


図1 表紙

©Kanda Sano Library, KUIS.

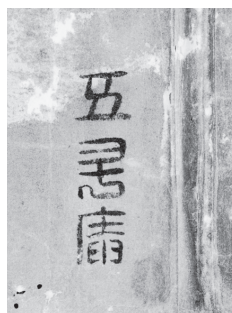


図2 帙の蔵書印

©Kanda Sano Library, KUIS.

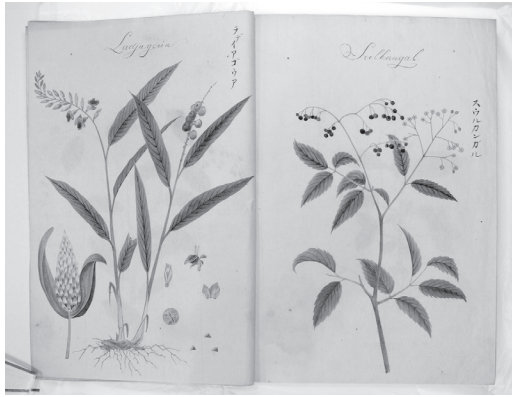


図3 第5丁裏と第6丁表
©Kanda Sano Library, KUIS.

129図のうち31図は余すところなく彩色しているが(図3)、残りの98図は植物学的に同定に役立つ部分のみに彩色を施し、他の部分は線描にとどめている(図4)という特徴がある。

植物図130図のうち、第1図から第105図まで、および、その間に挿入された鳥図4図には、アルファベットによる手書きの現地語名が付けられている(図5)。植物図第106図(第67丁表)にはフランス語名「Fougere」(sic:

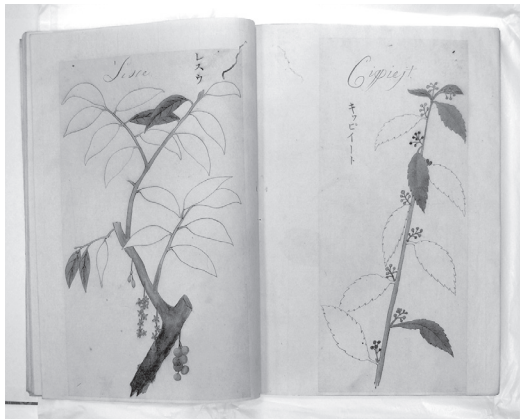


図4 第16丁裏と第17丁表
©Kanda Sano Library, KUIS.

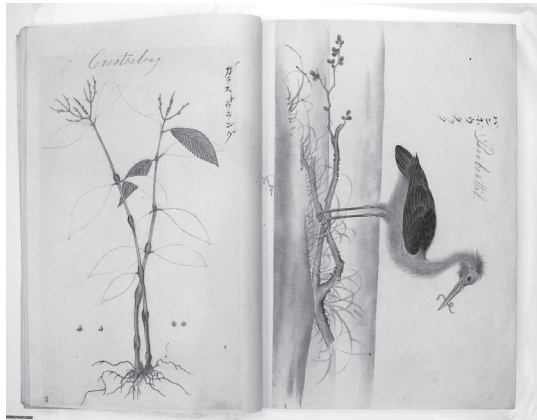


図5 第12丁裏と第13丁表⁽¹¹⁾

©Kanda Sano Library, KUIS.

Fougère、シダ)が付けられている(図6)。第107図以降、末尾までの植物図24図は無名である。第106図以降は人工的、装飾的な図様に描かれているものが多く、明らかに第105図までとは別系統である。

植物図の冒頭4図は料紙に直接描かれているが、第5図以降は薄い雁皮紙に描いたものを、料紙に貼り付けている。

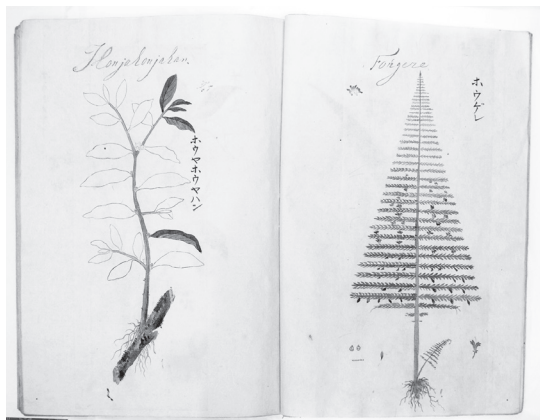


図6 『図譜』 第66丁裏と第67丁表

©Kanda Sano Library, KUIS.



図7 第5丁表(第2図)
©Kanda Sano Library, KUIS.

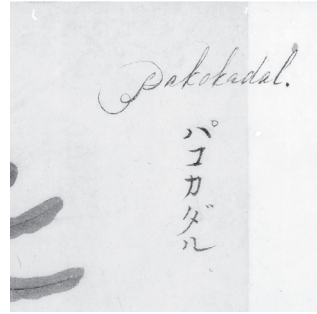


図8 第7丁裏(第7図)
©Kanda Sano Library, KUIS.

植物名の筆跡

植物図の最初の4図に書き入れられたアルファベット表記の現地語名(図9～図12)は、京都府立植物園大森文庫所蔵宇田川榕菴自筆の彩色植物図『写生植物 百貳種』⁽¹²⁾の植物名(図18、図19)、杏雨書屋所蔵『榕菴写生植物図譜』⁽¹³⁾の植物名(図17、図20～図22)と比較して、榕菴自筆と判断される。

	『図譜』植物名の筆跡	参照の筆跡	
図9			図17
図10			図18
図11			図19
図12			図20
図13			
図14			図21

図9～14 ©Kanda Sano Library, KUIS. 図17、図20、図21 杏雨書屋所蔵
図18、図19 京都府立植物園大森文庫蔵

図15

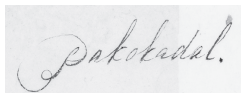


図22



図16

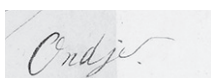


図23

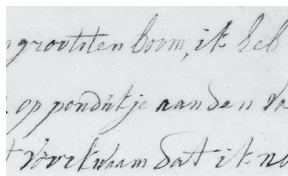


図15、図16、図23 ©Kanda Sano Library, KUIS. 図22 杏雨書屋所蔵

植物図の第5図の植物名(図13)、第6図の植物名(図14)は榕菴の手と比べると流麗さを欠き、運筆の速度も遅い。第5図以降は植物図を模写した雁皮紙を料紙に貼付し、その上から植物名が書き込まれている。辻蘭室が原本の書体を真似て筆写したと思われる。第7図の植物名(図15)、第8図の植物名(図17)以降はd字の綴り方に差異が見られるものの、辻蘭室の筆跡(図23)と判断される。

宇田川榕菴自筆の植物写生図

大森文庫の『写生植物』(写本2冊)は『写生植物百式種』および『写生植物百種』からなり、いずれもオランダ製洋紙に榕菴が日本植物を西洋植物画の筆致で描いている。『写生植物百式種』の元表紙は榕菴が書名「IAPANSCH-KRUIDBOEK dool [sic] IOAN」(榕菴筆日本草木誌の意)をギリシャ文字でペン書きし、西洋海浜風景図と「1825」の年号を加え、手書きの飾り枠(草模様)で囲い、さらに「宇田川印信」(朱文円印)を貼付している。この冊の本文はJ.Kool & Comp製のオランダ製洋紙を使用し、二冊とも植物名の多くはフォン・シーボルトの自筆である。

杏雨書屋の『榕菴写生植物図譜』(前述)は「Eenige japansche Planten」(日本植物若干、の意)の榕菴自筆書名が付けられ、榕菴自筆の植物図87図からなる。植物名はフォン・シーボルト自筆と榕菴の自筆が混在する。使用のオランダ製洋紙はKrantz de Charro & Com製である。

『写生植物百種』の巻末に「宇田川榕菴先生写生草木図三冊 大正三年十一月廿四日 ダアヴィン会アリ夜書肆文行堂ニ於テ購求(白井印)」と記してい

るところから、大森文庫と杏雨書屋の両写本はもともと一体のものであり、1825年頃のシーボルトと榕菴の密接な植物学交流を物語る記念碑的共著である。

しかし、榕菴はシーボルト来日（1823年）以前に、すでに植物写生図を西洋植物画の技法で描くために、西洋植物図譜の模写に励んでいた。榕菴が原本の



図24 宇田川榕菴筆ツタウルシ図（部分） 京都府立植物園大森文庫所蔵『写生植物』

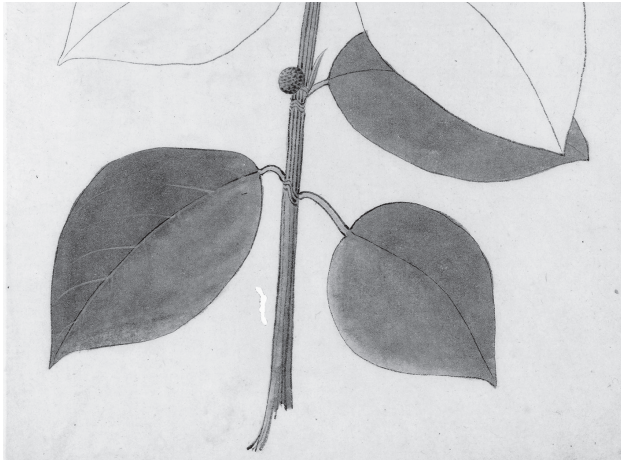


図25 『図譜』第11丁表「Kaietiap カアエチャップ」

©Kanda Sano Library, KUIS.

印葉図譜を模写した『キニホーフ氏植物図譜』（杏雨書屋所蔵、貴215）はその代表例である。この写本（和紙、袋綴じ）の巻末にはオランダ商館付医師ニコラス・チュリンフが「Woedagawa / Joan / Doctor / Ns Tullingh / Ao 1822.」の献辞を書き入れたオランダ製洋紙が綴じ込まれており、写本成立時期をうかがわせる⁽¹⁴⁾。

『図譜』は、シーボルト来日以前から、版本の銅版植物図や印葉図譜ではなく、西洋人植物学者の写生図から西洋植物画の技法を学ぶために、手本を渴望していた榕菴が、模写の機会を得たものと考えられる。一例として、『写生植物 百式種』p.61の「Tstawoersi」（ツタウルシ図）（図24）と『図譜』の「Kaietiap カアエチャップ」（図25）を比較すると、両者に相通じる技法を読み取ることが出来よう。



図26 『図譜』 第21丁裏と第22丁表⁽¹⁵⁾



「十八ウ」

「十九ラ」

図27 丁数記号（部分拡大）

図26、図27 ©Kanda Sano Library, KUIS.

18 「九ウ」 カラストラング (十ヲ バンボウタック) (鳥)	40 「二一ウ」 シレホモウンデイング
20 「十一ヲ」 アルリイレッタハヤム	41 「二三ウ」 カカメラング
21 「十一ウ」 メンテン	42 「二四ヲ」 タミアング (二四ウ 蘭文解説)
22 「十二ヲ」 キイレホ	43 「二五ヲ」 カッタトウンコル (二六ヲ 蘭文解説)
23 「十二ウ」 カランダン	45 「二六ウ」 ドウードレーナム (二七ヲ 蘭文解説)
27 「十四ウ」 モグマル	46 「二七ウ」 アルリイタバル
28 「十五ヲ」 エマクカア	47 「二八ヲ」 パパチイサン
29 「十五ウ」 レンドック	48 「二八ウ」 ソホル
30 「十六ヲ」 カトンバング	49 「二九ヲ」 パナン 「二九ウ」 マナクドウトット (鳥)
31 「十六ウ」 リンキング (十七ヲ 蘭文解説)	「三十ヲ」 マナクチラン (鳥)
32 「十七ウ」 コムパイ井 (十八ヲ 蘭文解説)	124 「七二ウ」 (無名)
33 「十八ウ」 キツパイート	125 「七三ヲ」 (無名)
34 「十九ヲ」 カンダスウリイ (十九ウ 蘭文解説)	126 「七三ウ」 (無名)
35 「二十ヲ」 ベラッパールウ	127 「七四ヲ」 (無名)
36 「廿ウ」 カカブウラン	128 「七二ヲ」 (無名)
	129 「七四ウ」 (無名)

表 1 『図譜』に書き入れられた元本の丁数記号

『図譜』の元本

『図譜』の植物図、全130図、鳥図4図は、植物図の最初の4図と裏表紙見返しの線描図を除いて、雁皮紙に模写されているが、雁皮紙の左下には、しばしば、元本の丁数と表(オ)、裏(ウ)を示す記号が細字で墨書されている(図26、図27)。一番最初の記号は「九ウ」、一番最後の記号は「七四ウ」である。

これらの記号をすべて、図番号と現地名のカナ表記とともに列挙すると、表1の通りである。これによって、榕菴が模写した元本は和綴じであり、蘭文解説、鳥図および系統のことなる彩色植物図(図番号106から129まで)も含めて、元本の順序のとおり模写されたことが分かる。ただし、図番号124から129は、雁皮紙を料紙に貼り付けた際に順序を間違ったため、錯丁となっている。こうした特徴から、『図譜』の植物図130図、鳥図4図はすべて宇田川榕菴自筆と判断される。



図28 左：ワインマン『花譜』（松浦史料博物館蔵）第463図 ジギタリス
右：小野蘭山旧蔵ワインマン『花譜』模写（個人蔵）

小野蘭山の模写本

以上のように『図譜』の元本が和綴じであったことから、その元本の作成者が問題となる。『図譜』の彩色植物図129図のうち31図は余すところなく彩色しているが（図3）、残りの98図は植物学的に同定に役立つ部分のみに彩色を施し、他の部分は線描にとどめている（図4）。榕菴に先立つ本草学者で、西洋植物図譜をこのように模写した例は、管見の限り、小野蘭山旧蔵のワインマン『花譜』模写図のみである。

蘭山が寛政11年（1799）3月に、幕府医学館で『本草綱目』の講義をするため江戸に呼ばれたあと、ドドネウス『草木誌』（1618）に和漢名を与える仕事に従事した際、ワインマン『花譜』を参照していることから、このワインマン『花譜』模写図（83枚、個人蔵）は、当時、蘭山が模写したものと推定される。フォリオ版の原書の彩色銅版図版82図を原寸大に、薄葉紙に引き写しているが、彩色はほとんどの場合、花、実、茎、葉、根など同定に役立つ部分のみにとどめ、他の部分は線描のままである⁽¹⁶⁾（図28）。

蘭山は江戸に発つ前、寛政9年（1797）年2月までに、大垣の蘭方医江馬蘭斎所蔵のドドネウス『草木誌』（1644年版）に和漢名を与えている。後述のように『図譜』が宮中地下官人の渡邊家に伝わったことを考えれば、蘭山が『図

譜』の元本を京都で作成したとの仮説は決して無理ではない。

第2章 ロンドン写本、パリ写本との比較

パリ写本

パリ写本はパリのフランス国立自然史博物館所蔵写本日録⁽¹⁷⁾に記載の Francisco Noroña 文書43番に含まれるノローニャ「ジャワ島植物誌」(彩色図108葉) Noroña, *Botanique de l'île de Java*. (108 feuilles de dessins en couleur) である。

ノローニャはルソン、マニラをへて1786年にオランダのバタヴィア学芸協会の許可を得て、ジャワ島の植物調査を行ったが、協力者と衝突したため、1787年2月にモーリシャス島へ渡った。マダガスカルでも調査したのち、翌1788年1月12日にモーリシャス島で病死した。パリ写本はノローニャが死に瀕して遺



図29 Paris 写本 第6図 Javanicè Kipait
Francisco Noroña, *Botanique de l'île de Java*. c. 1786
©Muséum national d'histoire naturelle

産相続人に指定したフランス人植物学者で、モーリシャス島で農園を営んでいたシャルパンティエ・コシニー (J.-F. Charpentier Cossigny de Palma, 1730~1809) が帰国後、パリの科学アカデミーに寄贈したものであり、ノローニヤ自筆とされる⁽¹⁸⁾。

シャルパンティエ・コシニーはベンガルのチンスラで、オランダ東インド会社チンスラ総督をしていた元出島商館長イサーク・ティチング (Isaac Titsingh, 1745~1812) と交流を深めた人物でもある。ティチング (商館長在任 1779.11.29~1780.11.5, 1781.11.24~1783.11.23) は離日後もファン・レーデ・トット・デ・パルケレルなど長崎オランダ商館員たち、阿蘭陀通詞や蘭癖大名朽木昌綱らと文通を続けていた。ティチングはファン・レーデ・トット・デ・パルケレルを介して、大坂の住友吉左衛門へフランス百科全書図版を贈呈している。

パリ写本の全108図の各図には学名のほかに、現地名がマレー語 (Malaice)、ジャワ語 (Javanice)、マレー語・ジャワ語共通 (Malaice et Javanice) の区別とともに書き込まれている。ノローニヤの自筆であろう。

ロンドン写本

ロンドン写本はロンドンの自然史博物館図書館所蔵フランス人植物学者デシャン L.A. Deschamps 資料の1冊、Noronha Java Plants である⁽¹⁹⁾。彩色図111図からなるが、第109図と第110図は同一植物の図であるため、実質は110図。ノローニヤがバタヴィア滞在中に支援者のヤン・ホーイマン J. Hooijman (バタヴィア学芸協会の熱心な会員) に贈呈した植物図をデシャンが入手したものと推定されている⁽²⁰⁾。各植物図の下部には植物の現地名が達筆で書き込まれている。

付属文書としてオランダ語で「ジャカルタ高地においてノローニヤ氏発見の植物の現地名に関するノート」(Notitie der Planten door den Heer Noronha gevonden in de jaccatrase Bovenlanden zoo als dezelve bij den Inlander genaamd worden) と題された現地名リストがある。このリストの現地名は植物図に書き込まれた現地名の綴りを正確に転写していない。

ノローニヤがヤン・ホーイマンに贈呈した植物図譜からは、1792年と1796年の二度にわたって、中部ジャワのスマラン Semarang 海軍兵学校において写本



図30 London 写本 第34図 Tjepait
©The Trustees of the Natural History Museum, London.

が作成されたことが分かっている。1792年の写本はバタヴィア学芸協会の依頼によるものであった。ベルリン写本はこのスマラン海軍学校で作成された写本のひとつであり、第二次世界大戦の戦災で失われたとされたが、現在、ベルリン国立図書館所蔵となっている⁽²¹⁾。

植物図・現地名比較対照表

『図譜』とロンドン写本、パリ写本の三者について、図と現地名の比較照合を行い、本章末尾の表2『『彩色ジャワ植物図譜』と在欧写本の植物図・現地名比較対照表』（紙葉の表をa、裏をbで表わす）にまとめた。この作業によって、以下の諸点が明らかになった。

(1)『図譜』の植物図130図のうち、ロンドン写本（全111図中2図は同一植物図であるため、実質110図）中で、同一の植物を描いた図と認められるものとして一致する図は102図にのぼる。しかも、『図譜』の植物図の最初の50図の順序はロンドン写本と一致する。両者の密接な関係がうかがえる。

しかし、細部は微妙に異なる場合が多いことから、同一の個体について複数



図31『図譜』 第25丁裏 Rassa-malla 図32 London 写本 第41図 Rassa-Mala
 ©Kanda Sano Library, KUIS. ©The Trustees of the Natural History Museum, London.

の植物画が制作されたものと考えられる。『図譜』の現地名の綴りは転写が重ねられたためか、原形を失ったものが多い。

(2)『図譜』の植物図130図のうち、パリ写本(全108図)中、同一の植物を描いた図と認められるものとして一致する図は90図であり、図の順序も対応関係は認められない。『図譜』の現地名とパリ写本の現地名との近親性はロンドン写本の場合ほど認められない。

(3)したがって、『図譜』のルーツはロンドン写本のルーツ、すなわちノローニャが1786～1787年のバタビア滞在中に描いた植物図のうち、モーリシャス島に出発する前に支援者のヤン・ホーイマンに贈与した植物図譜に求められる。この図譜から1792年と1796年の2度にわたって、スマラン海軍兵学校写本が制作されていることは示唆的である。もっとも、シャルパンティエ・コシニーが遺産相続人として受け継いだノローニャ資料のなかに、同様の写本が含まれていた可能性も否定できない。

(4)ロンドン写本、パリ写本のいずれにも鳥図は含まれない。しかし、パリ自然史博物館所蔵 Francisco Noroña 文書 No.43には「ノローニャ著ジャワ島動物誌」(Zoologie de l'île de Java par Norona)と題する12葉からなる図集が

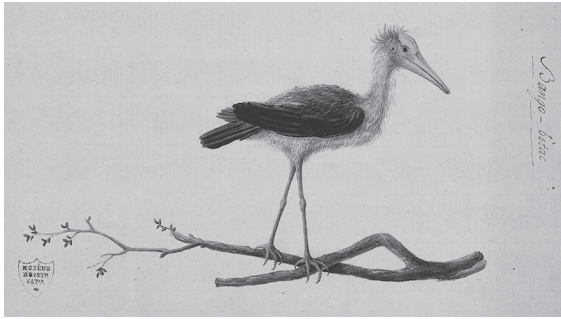


図33 Noroña, *Zoologie de Java*. 第2図 Banga-bòtac
Francisco Noroña, *Zoologie de Java*. c. 1786 ©Muséum national d'histoire naturelle



図34 『図譜』 第13丁表 Banboutak バンボウタック
©Kanda Sano Library, KUIS.

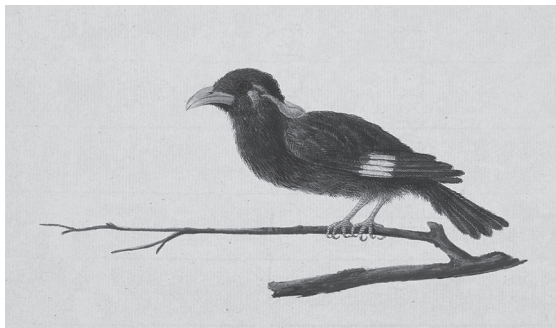


図35 Noroña, *Zoologie de Java*. 第4図
Francisco Noroña, *Zoologie de Java*. c. 1786 ©Muséum national d'histoire naturelle

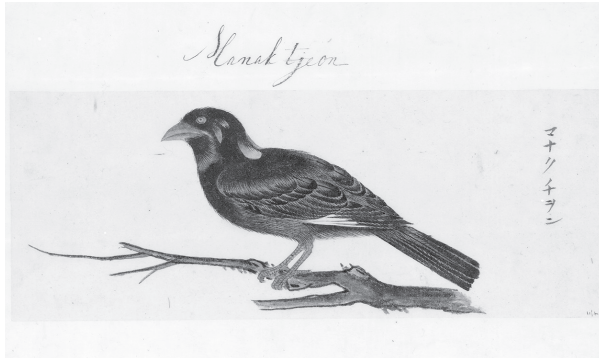


図36 『図譜』第34丁表 Manaktjeon マナクチラン⁽²²⁾
©Kanda Sano Library, KUIS.

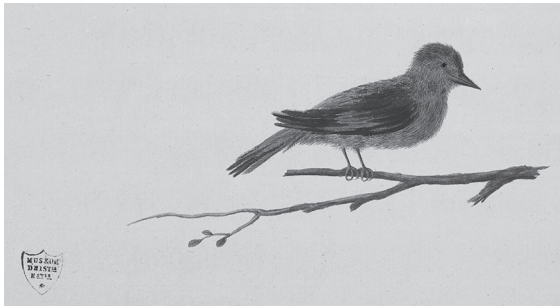


図37 Noroña, *Zoologie de Java*. 第3図
Francisco Noroña, *Zoologie de Java*. c. 1786 ©Muséum national d'histoire naturelle



図38 『図譜』第49丁表 Bouronsappau ボウロンサツバウ⁽²³⁾
©Kanda Sano Library, KUIS.

あり、鳥図6図を含んでいる。『図譜』の鳥図4図のうち、第33丁裏の Manak Doedot 図を除く3図(図34、図36、図38)は、それぞれ、この図集の鳥図の第2図(Banga-bôtac)、第4図(無名)、第3図(無名)に該当することが分かった。もっとも、両者間には細部の相違があり、植物図と同様、同一の個体について複数の図が描かれたことを示している。

(5)このように、『図譜』にパリの「ノローニヤ著ジャワ鳥動物誌」と同じ鳥図が3図含まれていること、しかも、和綴じの元本の一連の丁数が鳥図にも付けられていることから、元本の祖本である洋紙の写本は長崎渡来時点で、すでに鳥図を含んでいたと考えられる。

(6)『図譜』の植物図第106図にはフランス語名「Fougere」が付けられ(図6右)、残りの植物図24図は無名である。これら25図はパリ写本にもロンドン写本にも対応する図が認められず、とりわけ、第108図(図39右)と第114図(図40右)は装飾的であり、異質な様相を呈している。これら25図はすべて別の典拠によるものか、ノローニヤが関係しているかは、未詳である。

(7)ロンドン写本にもパリ写本にも、辻蘭室が筆写し和訳した蘭文解説に対応する記載はない。これらの蘭文解説はおそらくラテン語で書かれたノローニヤの原文を蘭訳したものに違いない。

しかし、『バタヴィア学芸協会誌』第5巻(1790)にラテン語とオランダ語

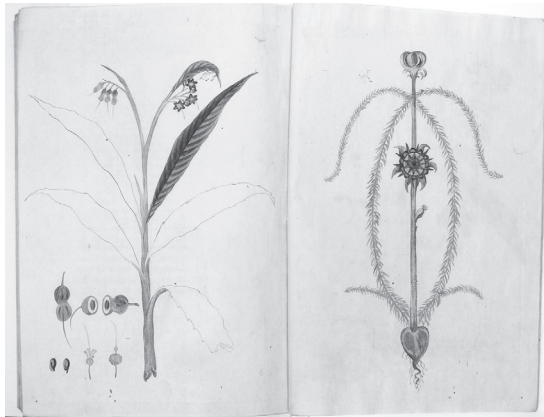


図39『図譜』 第67丁裏(第107図)と第68丁表(第108図)

©Kanda Sano Library, KUIS.



図40『図譜』 第70丁裏 (第113図) と第71丁表 (第114図)
©Kanda Sano Library, KUIS.

の両語で掲載されたノローニヤの遺作論文「マレー語およびジャワ語でラサマラと呼ばれ、ルンフィウスが『アンボン島草木誌』第2巻57頁でリグヌム・パプアヌムと呼んだ高木アルテインギア」⁽²⁴⁾を見ても、『図譜』の第40図「ラスサマルラ」(図31)の蘭文解説に対応する記述は確認できない。同巻には、やはりラテン語、オランダ語の両語による論文「ランガス樹誌」⁽²⁵⁾も収録されているが、『図譜』にランガス樹図はない。『図譜』の蘭文解説の原文(おそらくラテン語)の所在、オランダ語への翻訳者は未詳である。

表2 『彩色ジャワ植物図譜』と在欧写本の植物図・現地名比較対照表

『彩色ジャワ植物図譜』			London-写本	Paris 写本
植物図番号	紙葉	植物名 (現地語)	植物名カナ書き	図番号と現地名 ()のない現地名はJavanice
	1a	(白紙)		
	1b	(蘭文解説4aの冒頭部分、反故)		
	2a	(白紙)		
	2b	(白紙)		
1	3a	Cattomas	カットマス	なし
	3b	(蘭文和訳)		
	4a	(蘭文解説)		
	4b	(蘭文解説)		
2	5a	Droyak	ドロヤック	なし
3	5b	Ladigoua	ラヂイアゴウア	P093 Tapol, sive Lancoosutan
4	6a	Soekangkal	スウルクアングアル	P018 Casur-tuaと反照類似
5	6b	Rondoelbaddak	ロンドウバダック	P020 Sambalang (Malace) Brundur Badac
6	7a	Ramee	ラチー	なし
7	7b 1	Pakokadal	パココダタル	なし
8	7b 2	Capat	カパット	なし
9	8a	Ondje	オンヂイ	なし
	8b	(蘭文解説)		
10	9a	Bomboelanguoutjan	ボンブウランゴウチアン	P027 Bumbulan-poehang
11	9b	Ranica	ラニーア	P008 Rania
12	10a	Kietatjanker	キイタアチヤンケル	なし
13	10b	t. Jombok	ヨンコック	なし
14	11a	Kaetieap	カアエチヤップ	P034 Choncoe
15	11b	Eijen	エチエン	なし
16	12a 1	Soucut	ソウコウト	図は一致
17	12a 2	Kilanpasser	キイランパスセル	P010 Gelang-pasir (Malace)
18	12b	Crasfoelang	カラストウラング	P094 Cras-tulang (Malace et-Javanice)
19	13a	Bambouttak (鳥)	バンボウタック	なし (Zoologie de Java 第2図 Banga-botac)
20	14a	Babawanan	ババワナン	P092 Baua-uangan
21	14b	Arriolettahayam	アルリイレッタハヤム	P026 Caanh-an-sait
22	15a	Kieleho	キイレホ	P051 Menten (Malace et Javanice)
23	15b	Kelandan	カランダン	P058 Keleho (Javanice), Lelendera (Malace)
24	16a	Colossan	コロスサン	P014 Cambang-bacal
25	16b	Lesoe	レスウ	P050 Landa (Malace)
26	17a	Cipiteit	キップイート	P049 Lesue
27	17b	Mogmal	モグマル	P104 Kipitit
28	18a	t. jemakka	エマクカア	P004 Muh-mall
				P032 Daun rac-rac (Malace)
				P029 Djamakka

29	18b	Rendok	レンドック			30. Kekhoeja 名異	P091 Rindoc (Malaise), Cuyva (Javanice)
30	19a	Catompang	カトンプァング			31. Katoempaan	P011 Catumpaan
31	19b	Lankng	リンキンング			32. Rambhoetan Afje 名異	P080 Lankng (Malaise et Javanice)
	20a	(蘭文解説)					
32	20b	Compayi	コムバイイ			33. Kompahi	なし
	21a	(蘭文解説)					
33	21b	Cippayit	キツパイト			34. Tiempait	P006 Kipait
34	22a	Candasoelie	カンダスウライ			35. Ghandia Soelie	P003 Candasuli
	22b	(蘭文解説)					
35	23a	Belappeloe	ベラッペールウ			36. Bla-bloe	P083 Bla-blu
36	23b	Cacaboelan	カカボウラン			37. Kakka Boelan	なし
37	24a	Kiesadjak	キエアダック			38. Kir-Adjak	P103 Kiasang
38	24b	Cilhomounding	シレホモンディング			39. Kihlo Moendin	P059 Kileho-mundim
39	25a	Takal	タンカール			40. Tankal Sante	P073 Yancee
40	25b	Rassamalla	ラスマールラ			41. Rassa-Mala	なし
	26ab	(蘭文和訳)					
	27a	(蘭文解説)					
41	27b	Cacamerang	カカメラング			42. Gaga Mera	P048 Gamiram
42	28a	'K, tamiang	タミアング			43. Rita mia	P036 Tamiam
	28b	(蘭文解説)					
43	29a	Cattatoumkol	カッタトゥンコル			44. Katoe toemkoel	P068 Catutuncul
44	29b	Jonkhotieraro	ヨウホツトシライアロ			45. Djoekoet Siraroe	なし
30a	30a	(蘭文解説)					
45	30b	Doedbremsam	ドクードレーナム			46. Doedbremsam	P102 Durenam
	31a	(蘭文解説)					
46	31b	Arrieataball	アルリイタバール			47. Arie Tehal	P047 Daun-tabal (Malaise), Casa-bughal (Javanice)
47	32a	Papattiesan	パバチイサン			48. Pepetisan	P064 Tockin
48	32b	Sohor	ソホル			49. So-or	P012 Sohor
49	33a	Panan	パナン			50. Pangan	P054 Pangang
	33b	Manak Doedot (鳥)	マナクドウトット			なし	
	34a	Manakheon (鳥)	マナクチョン			なし (Zoologie de Java 第4図にあり、無名)	
50	34b	Kiesapan	キエサンパン			51. Khey Sampan	P016 Kissampang
51	35a	Catokmanak	カトックマナク			60. Katok Manok	P066 Caturemanuc' seu Oyot ampelas
52	35b	Cacapassan	カカパスサン			26. Kakapassan	P046 Marjacunda (Malaise), Cacapassan (Javanice)
53	36a	't Jannar	ヤンナル			27. Tjanar	P096 Oyot-chamar
54	36b	Boumor	ボウモル			58. Boengoer	P070 Banghur (Malaise et Javanice)
55	37a	D-jatie	デアチイ			59. Tatie	P041 Tati (Malaise et Javanice)
56	37b	Pouspa	ポウスパ			61. Poespa	P056 Puspaa
57	38a	Kielalayo	キエラヤヨ			62. Kila Lavoie	P078 Kilavu
58	38b	Paparyan	パパールヤン			69. Paranyan	P019 Parrayan
59	39a	Kemontjemien	ケモンニニン			68. Kimonjoe	P043 Lambutan, vel Monenem
60	39b	Tjontkankan	チョウカンカン			82. Tjontkankan	P029 Chuncankan
61	40a	Kemantjanan	ケマンヤナン			83. Kimantjanan	P033 Kimantjanan
	40b	(蘭文解説)					

62	41a	Havambayaman	ハヤムハヤマン	74. Havahajaman	P063 Avamayaman
63	41b	Kielamin	キイラニン	75. Kilangit	P031 Kilangit
64	42a	Kiemeon	キイメロン	64. Kimejon	P085 Kimeon
65	42b	Talinbop	タリンボップ	63. Talinboep	P084 Talinboep
66	43a	Tangelmentik	タンガリンメンティック	93. Tanglin mintek	なし
67	43b	Saradon	サラダン	65. Saradan	P082 Saradang
68	44a	Tankalak	タンカラク	52. Tankalak	P044 Tankalak
69	44b	Mauchon	マウコン	53. Moehon	P022 Muhn
70	45a	Gatohmanislic	カトックマーニス	94. Katok manies	P076 Caturmanis
	45b				
71	46a	Kieharit	キイハビット	95. Kihatip	P081 Kibapit
72	46b	Bomboelang	ボンブウラン	84. Boemboelan	P065 Bumbulan 図は未完成
73	47a	Tollor	トルロル	66. Tobohl	P062 Yucut-toboo
74	47b	Maiella	マレラ	67. Djoekoeit Malela	P068 Yucut-malela
75	48a	Ratoulalakie	ラチラウラアキイ	54. Ratjoen Lalakkie	P030 Rajung 欄図や裏
	48b				
76	49a	Bourousappau	ボウロンサツハウ	なし	なし (Zoologie de Java, 第3図にあり、無名)
77	49b	Koupgougouk	コウゴウラック	87. Koepa Chowok	P072 Boar goe
78	50a	Lenssar	レンサル	88. Lenssar	P021 Lingsar
79	50b	Kiera hout	キイラアホウト	86. Kirahut	P005 無名 図は一致
79	51a	Pinko	ピンコ	85. Pinko	P039 Pincu
	51b				
80	52a	Bikigetan	ビクキイタン	77. Bijitan	P053 Bightan
81	52b	Salam	サラム	76. Salam	P071 Salam
82	53a	Piemantan	ピイナンハン	89. Pipinangan	P025 Pinangan
	53b				
	54a				
83	54b	Cayjousalle	カイヨウサルレ	90. Katsale	P038 Caju-sale
84	55a	Uvotlambou	ウイヨットラムボウ	80. Ojoth Lamboe	P088 Oyoit-lambu
85	55b	Kekeci, Jouan	ケケチウアン	81. Keke Jouan	P100 Kekevoan
86	56a	Contolmonjet	カントルモンジェット	103. Kontol monjet	P035 Contolmonjet
87	56b	Loeksa	ロクサ	102. Loeksa	P009 Loesa
88	57a	Groumbie	ゴロムビイ	98. Karoembi	P086 Crambi
89	57b	Candoun	カンドウン	99. Kandoen	P013 Candun
90	58a	Pacourantian	パコウランチアン	97. Pakoe Ramjan	P099 Pacur-alam
91	58b	Cajou-seronie	カイヨウセロロニイ	96. Seronie	P023 Caju-saruni
92	59a	Hoerommeera	フウロンメーラ	91. Ghoeroe mera	P045 Hura-gading
93	59b	Cajousaemintan	カイヨウサアニンタン	92. Samintan	P079 Caju-senintan
94	60a	Uyot-honjorboehot	ウイヨットホンヨルブオホット	100. Hoerjot Boeht	P087 Hunjut-buhut
	60b				

95	61a	Kearopa	ケアローパ	なし	なし	なし
96	61b	Filissavanicia, suckoradja	ヒリキスヤクハニイカ シユエツコラヂア	なし	なし	なし
97	62a	Kehadjolie	キエソウゴン	79. Kehadjolie	P028 Kihayali	
98	62b	Kiesouwchon	ケハディエーリイ	78. Kaysaughun	P098 Kissauhum	
99	63a	Cayjou soeven	カイヨウスーベン	105. Soerian	P007 Cajur-suren	
100	63b	Pinango	ピナングウ	104. Karpinangon	P052 Pinaugo	
64a		(蘭文解説) (蘭文和訳)				
101	64b	Cadassie	カダスンイ	73. Kadassie	P061 Cadassj	
102	65a	Irinkel	イーンコル	70. Dienkol	P089 Tincol (Malaise et Javaniee)	
103	65b	Keheho	ケホホー	71. Kir-hohe	P040 Kihoe	
104	66a	Houvodagin	ホウボダギン	72. Koero dagin	P095 Huru-Jpiscolit	
105	66b	Honjhanjahhan	ホウキホウキヤハン	57. Oeioe Ojahhan	P077 Uyaayahhan	
106	67a	Fougere	ホウダレ	なし	なし	
107	67b	(無名)	(無名)	なし	なし	
108	68a	(無名)	(無名)	なし	なし	
109	68b	(無名)	(無名)	なし	なし	
110	69a	(無名)	(無名)	なし	なし	
111	69b	(無名)	(無名)	なし	なし	
112	70a	(無名)	(無名)	なし	なし	
113	70b	(無名)	(無名)	なし	なし	
114	71a	(無名)	(無名)	なし	なし	
115	71b	(無名)	(無名)	なし	なし	
116	72a	(無名)	(無名)	なし	なし	
117	72b	(無名)	(無名)	なし	なし	
118	73a	(無名)	(無名)	なし	なし	
119	73b	(無名)	(無名)	なし	なし	
120	74a	(無名)	(無名)	なし	なし	
121	74b	(無名)	(無名)	なし	なし	
122	75a	(無名)	(無名)	なし	なし	
123	75b	(無名)	(無名)	なし	なし	
124	76a	(無名)	(無名)	なし	なし	
125	76b	(無名)	(無名)	なし	なし	
126	77a	(無名)	(無名)	なし	なし	
127	77b	(無名)	(無名)	なし	なし	
128	78a	(無名)	(無名)	なし	なし	
129	78b	(無名)	(無名)	なし	なし	
130	79a	(無名) (素描)	(無名)	なし	なし	
	79b	(白紙)	(無名)	なし	なし	

第3章 辻蘭室筆蘭文解説の翻刻および和訳

【凡例】

1. 『彩色ジャワ植物図譜』（以下、『図譜』）中には、植物図全130図のうち17図の各図について、蘭文解説およびその和訳を添え書きしている（図41参照）。いずれも蘭学者辻蘭室が自筆で料紙に墨書したものである。これらを翻刻する。
2. 蘭文解説は原作者 Francisco Noroña の原文（伝存不明、言語未詳、ラテン語か）の蘭訳である。この蘭訳はオランダ人が日本人のために行ったと推定されるが、蘭訳者は未詳であり、辻蘭室が和訳した以外にも蘭訳があったかどうか分からない。
3. 各図の標目として、植物名の片仮名書きを「 」内に掲げた。蘭文解説および和訳の挿入位置は、前章に掲げた表2「『彩色ジャワ植物図譜』と在欧写本の植物図および現地名比較対照表」にならって、丁数記号（aは表、bは裏）で示した。
4. 蘭文原文の翻刻にあたって、原文の改行は無視し、行末の分かち書きは採用しなかった。原文には段落がない。あえて段落を設けず、原文の句読点を出来る限り維持した。nとuを区別するためのアクセント記号は無視した。綴りの脱字は〔 〕内に補い、綴りの誤りをそのままにした場合は[sic]、訂正した場合は[sic:]を用いて示した。辻蘭室の訳文に句読点はない。読みやすくするため句読点を付し、適宜段落を設けた。また、漢字は通行の書体に改めた。
5. 蘭文解説に現代日本語の逐語訳を付し、辻蘭室の訳文と対比させた。逐語訳には、適宜段落を設けた。

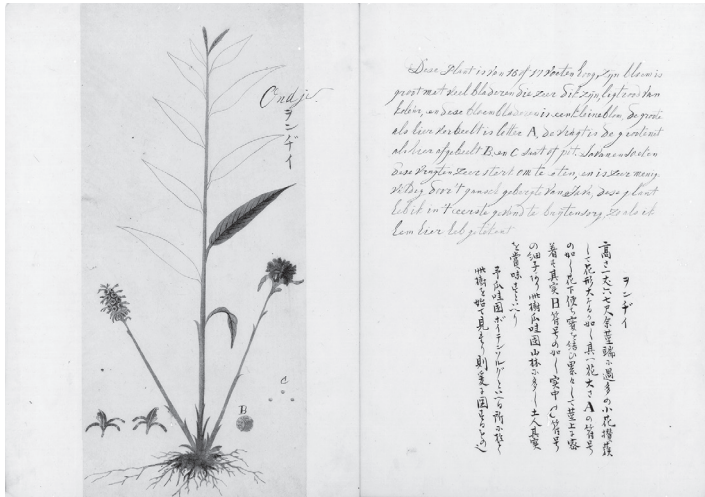


図41⁽²⁶⁾ 第8丁表

第8丁裏

©Kanda Sano Library, KUIS.

辻蘭室筆蘭文解説の翻刻および和訳

1. 「カツトマス」

[4a] Dit is een kleyn boompie de grootste van 12 voet hoog, uytmuntent fraay alle anderen door zyne blinkerende goud gekouleerde bladeren, 't welk zyn 7 of 8 duymen lang, zeer schoon van koleur met goud geel plekken in 't gras groen blad gemengeld, dog de geele plekken zyn 't meest in 't midden van 't blad, en 't groen op de kanten, dese bladeren staan een aan een digt by malkanderen, regt over ende naar boven, de dikste staan [sic: stam] is als een groote arm dik, bruyn van kleur, als men den dikke stam afkapt, dan druypt 'er een zuyper klaar water uyt, 't welk de Javanen tot een medicyn gebruyken, voor roode oogen, laten dit water uyt den afgekapte stam, in de oogen druypen, 't welk ik by ondervinding heb, dat dit water den oogen zeer zuyvert en klaar maakt, heeft den smaak van zuyper water, dog soetagtig, maar zeer koud, de bloemen zyn van de grootte als hier vertoont word, groeyen aan een lang groen takje, 't welk altyd in de midden van een tak komt,

na boven ziende, 't bloeyssel is een klein geelagtige bolletje op een kleyne roode lank steeltie, 't bloemtie is van 6 kleine spitspuntige bladiens met goud geel koleur alle regte over ende maar boven ziende, dese [4b] bloem heeft weynig theeagtige reuk, de vrugt ryp zynde is de groote van een eerwt, zwart van kleur weynig na 't groen trekkende in 't schil vind men een sneeuw witte pit, zeer droog, en rond deze vrugt heeft een biteren smaak en aang [e] naam, by de Javanen niet gebruikbaar, de Javaanse vrouwen nemen deze bladeren van dit boo [m] pie en knauwen die met de bladeren van kiesanpan en bespouwen hunne kleine kinderen met dit sap, als zy denken dat hunne kinders met eenige tooveren bezeeten zyn: agten dit voor een groote middel tegen alle tovery, zy nemen ook takken van deze struyk en plante [n] dit rondom hunne graven, en zeggen dat de duivel hier mede verweert, zy gebruiken ook deze takken op bruiloften tot tekens van zuiverheid.

カツトマス

[3b] 高さ一丈二尺余にして、周囲大なる人腕の如く、爰に図する所のものは其一枝也。葉狭長、其大なるもの長サ七八寸、色青緑に金色駁雜し、或ハ辺端綠色にして、中間金色の斑点ありて壯觀、甚鮮妍なり。一枝数葉密に層生して、每枝頂上より一条抽て聚花を結ぶ。花卉鋭く黄金色にして香気茶に似たり。花葉俱に直仰して天を指す。花下青黒の実を生じ、中に白色の種子あり。其性質燥乾、味苦して食薬に供せず。

土俗その株幹に刀傷を成し、其痕より出る所の精液を採りて、赤眼障翳を療す。予其質を監考するに、気味甘く性寒冷なり。故に血熱を醒し、膚翳昏暗を明白にするものなるべし。

爪哇国の家婦、僱僮の邪惡に犯さるゝ時、此樹葉とキイサンパンと云る葉とを噛み、其汁を病兒に注ぎて患災を除く。或ハ此樹を墳墓の旁に種栽すれば、邪鬼を退くと云ひ、又は祭祝婚姻の式に、此樹清潔なるを以て其枝葉を粧飭すと云へり。

(蘭文逐語訳)

これは高さ12フィートの小木で、金色に輝く葉によって他のものよりもはるかに美しい。その葉は長さ7ないし8インチあり、草色の葉に黄金色の斑点が混じって大変美しい。しかし、黄色い斑点は葉の中央にもっとも多く、端は緑

色である。葉は向かい合いながら上方に向かって互いに密接している。最も太い枝は大きな腕のようで、褐色をしている。

太い枝を切り取ると、透明な液がしたたり落ちる。ジャワ人たちはそれを赤目の薬に用いる。この液を切り取った枝から眼の中に点滴するのである。実際に私が確かめたことだが、この液は眼の汚れを除き清潔にする。真水の味があり、すこし甘みがあるが、大変冷たい。

花はここに描き出したほどの大きさがあり、常に枝の中央に上向きに付いている長い緑色の小枝の先で成長する。花の蕾は小さい黄色の玉で、細長く赤い茎の上につく。花は6枚の槍のように尖った黄金色の花弁からなり、花弁は向き合いながら上方を向いている。花は少し茶の香りがする。果実は熟するとエンドウ豆の大きさととなり、すこし緑色を帯びる。果皮のなかには雪のように白い種があり、大変乾いており丸い。この実は苦味があり美味であるが、ジャワ人は利用しない。

ジャワの女性たちはこの小木の葉を摘み取ってキーサンパンの葉と一緒に噛み碎き、自分の幼い子供に吐き付ける。彼女たちは子供が何か魔物に取り憑かれたと思ったとき、これをどんな魔術にも利く特効薬と考えているのである。彼女たちはまたこの灌木の枝を切り取って墓の周りに植える。こうすることで悪魔が払われると彼女たちは言う。彼女たちはまた、この枝を婚礼の際に純潔の印として用いる。

2. 「ランヂイ」

[8b] Deze Plant is van 16 of 17 voeten hoog, zyn bloem is groot met veel bladeren die zeer dik zyn, ligt rood van kleur, en deze bloembladeren is een kleine blom, de groote als hier verbeelt is letter A, de vrugt is de groote net als hier afgebeeld B. en C zaat of pit. Javanen zoeken deze vrugten zeer sterk om te eten, en is zeer menigvuldig door 't gansch gebergte van Java, deze plant heb ik in 't eerste gevond te buytenzorg, zo als ik hem hier heb getekent.

ランヂイ

高さ一丈六七尺余、莖端に過多の小花攢簇して、花形大なるが如く、其一花大さAの符号の如く、花下便ち実を結び、累々して莖上に密着す。其実B符

号の如く、実中にC符号の細子あり。此樹爪哇国山林に多し。土人其实を賞味すといへり。

予爪哇国ボイテンゾルグといへる所に於て、此樹を始めて見たり。則爰に図するもの也。

(蘭文逐語訳)

この植物は高さ16ないし17フィートあり、花は大きく、分厚い花卉が沢山ついている。色は赤みがかっている。これらの花卉が小さな花となっており、その大きさは文字Aの図の通りである。実の大きさはB図の通り、Cは種あるいは仁である。ジャワ人はこれらの実をしきりに求めて食用としている。しかも、ジャワの山中至る所に繁茂しており、私がこの植物を最初に見たのは、ボイテンゾルグであった。ここに図示した通りである。

3. 「リンクング」

[20a] Is een grooten boom, ik heb 'er een gezien op Pondukje, staande aan de zyde van 't huys, waar van ik deze tak heb genomen en getekent als hier verbeeld is, de bast van deze boom smaakt kaneelagtig.

リンクング

大樹なり。予爪哇国ボンデユクキと云へる所、民家の旁に、此樹あるを見たり。則其一枝を採りて画図するものなり。其樹皮粗肉桂の香気あり。

(蘭文逐語訳)

大木である。私はその一本をボンデユクキで見た。民家の側に聳えていた。私はその枝を切り取って描いた。ここに図を示すとおりである。この樹皮はシナモンの味がする。

4. 「コムパイ井」

[21a] Deze plant is eens zo groot als hy hier verbeeld is, heeft nooyt geen vrugten of geen bloem.

コムパイ井

此種の大さ、図する所の如し。花実を結はず。

(蘭文逐語訳)

この植物はちょうどここに図示したほどの大きさである。実も花も決して付

けない。

5. 「カンダスウリイ」

[22b] Deze plant is van 2 à 3 voet hoog, heeft een zeer welruykende bloem.

カンダスウリイ

此種高さ二三尺余、其花芳潤なり。

(蘭文逐語訳)

この植物は高さが2ないし3フィートあり、大変良い香りのする花を付ける。

6. 「ラスサマルラ」

[27a] Deze is een grootsten boom, ik heb 'er een boom gezien den 14 oktober 1786. op pondukje aan den voet van de groot berg, die my zo groot voorkwam dat ik nooyt zou wille geloven hebben, dat 'er zulke groote bomen in de wareld [sic] waren, zyn ditkte net of men by een toorn waren, de bast witagtig van koleur, zyn hoogte verschrikkelyk als in de wolken uystekende [sic] regt als een gespannen draat tot boven toe, nievers [sic: nevens] geen takken, als boven een schoon ronde kruyen [sic: kruyn], waar veel groote vogels in huys nesten, de Javanen bewaren deze boom voor rariteyt.

Deze getekende tak is genomen van een kleine boom die in zyn bloemen was; bloem die purper van koleur is de vrouwelyk die de vrugten voortbrengh, de geel bloem is de manlyk die verdragen en afvallen, de vrugt is omtrent zo klein als 't hier verbeelt, B de 2 amandeltje dan malkander, C een amandeltje D de amandeltje die 'er binnen inzetten, is zeer lekker om te eten zyn. E 't zaad, F de schelpen van 2 amandeltje, G een stuk van de vrugt of groote schelp, 't hout van deze boom heeft een aangenaame reuk en is zeer verwerkbaar [sic], maar 't word nooyt droog.

[26b] ラスサマルラ

曆数一千七百八十六年十月十四日、爪哇国ボンデユクキイといへる所の山址に於て、此樹の大なるものを見たり。其周圍大なること大伽藍の如く、数十丈

量べからず。岑々として雲中に聳へ、其樹の正直 [26a] なること稍より垂準を下たるが如し。周木枝条なく、樹の頂に葉聚り、叢生して円形を成し、其繁茂綿密なること宛も作り成せるが如して、衆鳥爰に栖宿す。土俗これを奇木とす。

爰に図するは其嫩枝、花実満盛のものなり。雌雄の二種あり。紫花なるものを雌とし、黄花なるものを雄とす。黄花は枯落して実を成さず。雌木は子実を結ぶ。G は実なり。中に B の双核あり。C は其一核なり。D は核中の仁なり。甚美味にして珍果とす。E は種子なり。F は実中の双核を包む薄皮なり。

(蘭文逐語訳)

これは巨木である。その一本を1786年10月14日ポンデュキユの高山の麓で見かけた。目の前に現れた大きさといったら、この世にこれほど大きな木があろうとは信じられないほどだった。その太さはまるで塔の側にいるようだった。樹皮は白色がかった。恐ろしいほどの高さは、まるで雲の中に糸を天辺までまっすぐに張ったようで、脇に一枝もなく、沢山の大鳥が巢作りをする見事な丸い樹頭のようなだった。ジャワ人はこの木を珍木として大事にしている。

ここに描いた枝は開花した小ぶりの木から切り取ったもので、赤紫の花は実を付ける雌花であり、黄色の花は交配が終わると落下する。実はたいていここに図示したように小さく、B は二重の実、C は一重の実、D はその中の実で、大変美味しく食べられる。E は種子、F は二重の実の皮、G は皮の付いた実の全体である。この木の材はこち良い香りがあり、刺激的であるが、常に乾いていない。

7. 「タミアング」

[28b] Is een plant van 12 ã 13 voet, zyn wortel buyten gemeen wit, deze plant of boompie dragt nooyt zyn vrugt of bloem, als op de steeltie van de bladeren 't welke zeer aardig is om te zien.

タミアング

高さ一丈二三尺余、其根至て白く、花実なく、其葉柄の枝柯に付着すること奇異にして、賞観美なり。

(蘭文逐語訳)

12ないし13フィートの植物である。その根は非常に白い。この植物あるいは

小木は葉柄の上にはか実や花を付けない。葉柄は眼にとても美しい。

8. 「ヨウクホツトシイラアロ」

[30a] Dit plantje is hier levens grooten afgebeeld, zyn wortel is zeer vergiftig en onverdraaglyk stank, 't geheele plantje heeft een onverdraagelyken leelyken stank, men vind 't zeer zelden, somtyds in slykagtige en ongankbaar plaats en waar dit plantje is vind men altyd veel scherpioen [sic].

ヨウクホツトシイラアロ

此樹大さ、図する所の如し。枝葉根ともに臭気惨烈なり。其根に大毒あり。荒廃湿地に生じて最も罕なり。此樹の生る所、必蝸多しといへり。

(蘭文逐語訳)

この小植物は実物大に描かれている。根は大変有毒で耐えがたい臭気がある。植物全体が耐えがたい鼻をつく臭いがある。非常に稀にしか見られないが、分け入りがたい泥質地に生えていることがある。この植物のあるところは、常にサソリが沢山見つかる。

9. 「ドゥードレーナム」

[31a] Is een boom 18 of 20 voeten hoog, en een zeer aangenaam en lieflyk boompie, wegens zyne lekkere vrugties, en welruykende bloemen.

ドゥードレーナム

高さ一丈八尺或ハ二丈余、花芬馥にして其实美味なり。

(蘭文逐語訳)

高さ18ないし20フィートの樹木である。その甘い果実と芳香のある花のおかげで、心地よい愛すべき灌木となっている。

10. 「ケマンヤナン」

[40b] Deze plant is zes of agt voet hoog, groeyt altyd op oude en verrotte tronken van boomen, zyn vrugt heeft een zuuragtige bitter smaak, oneetbaar, en is de groote van een hert [sic: ert] : zyn altyd 5 of 6 by mal-kander in een huysie van kleyne bladeren.

ケマンヤナン

高さ六七尺余、好で槁根腐木の中に生ず。花後殻を生じ、其中に五六の子実を包む。其大さ豌豆の如し。味酸苦にして食品に用ず。

(蘭文逐語訳)

この植物は高さが6ないし8フィートあり、常に樹木の古く腐った幹に生えている。その実は酸味と苦味があり、食べられず、エンドウ豆の大きさである。小さいいくつかの花弁で出来た房の中に5、6箇、重なっている。

11. 「カトツクマーニス」

[45b] Is een kleine boompie van 9 of 10 voeten hoog, zyn vrugt is als een kleine appeltie zeer lekker om te eeten, en by de Javanen zeer sterk gezogt.

カトツクマーニス

高さ九尺或一丈余、其实佳好にして土俗是を珍味とす。

(蘭文逐語訳)

高さ9ないし10フィートの小木で、実は小さなリングのようで美味しく食べられる。ジャワ人は争ってこれを求める。

12. 「ラチヲウララアアキイ」

[48b] Dit is een kleyne boom van 14 à 16 voeten hoog, de bloem is een weinig welruykent, de vrugt is de groote van een ert, en is ongebruikbaar.

ラチヲウララアアキイ

高さ一丈四尺或は一丈六尺余、其花少しく芬香あり。実大さ豌豆の如し。不食。

(蘭文逐語訳)

高さ14ないし16フィートの小木である。花は僅かに芳香があり、実はエンドウ豆の大きさであるが、役立たない。

13. 「ピンコヲ」

[51b] Dit is een boomie van 12 of 14 voeten hoog, Zyn bloemen zyn buitengemeen aangenaam van reuk, zyn vrugt stinkt en is vergiftig, de groote van een duyven ey.

ピンコヲ

高さ一丈二尺或は一丈四尺余、其花最も馥郁にして、子実臭気甚しく大毒あり。

(蘭文逐語訳)

高さ12ないし14フィートの小木である。花は非常に心地よい香りがあるが、実は臭気があり有毒で、鳩の卵の大きさである。

14. 「サラム」

[53a] Deze boom heeft een geheel schoon aanzien, en zeer groot, zyn bloem heeft en ongemeen aangenaam reuk, en zyn vrugt is zeer eetbaar, en smaakt zeer goed en is de groote van een duive ey.

サラム

花香気芬芳にして、実の大きさ鳩卵の如くして、佳味なるがゆへに専ら果食に備ふ。

(蘭文逐語訳)

この木は実に美しい姿をしており、大変背が高い。花は非常に心地よい香りがある。その実はよく食べられ、大変美味しく、鳩の卵ぐらゐの大きさである。

15. 「ピイナンハン」

[54a] Is een boom van 11 of 20 voeten hoog, zyn vrugt zyn net als eyeren, en ook groot als een hoendersey.

ピイナンハン

此樹高さ一丈九尺或は二丈余にして、其实 卵黄の如し。

(蘭文逐語訳)

高さ11ないし20フィートの木である。その実はちょうど卵のようであり、大きさは鶏卵大である。

16. 「ライヲツトホンヨルブウホツト」

[60b] Dit is een Heerlyke plant zeer sierlyk door zyn schoon vrugt en bloem, de blom zyn weinig grooter als hier verbeelt, maar de vrugt is groter als twee vuysten, en heeft een zeer goede aangenaam reuk, en is een heerlyk

eeten, zyn wortel heeft een lekker reuk en is zeer gomagtig en goed voor medicyn.

ライヲツトホンヨルブウホツト

花図する所のものより粗大く、其实潤大なること双掌の如く、味ひ香しく果食に充つ。株根芬香にして、膏油多く、以て薬用に供す。

(蘭文逐語訳)

この素晴らしい植物はその美しい実と花によって大変優雅である。花はここに描いた図より少し大きく、実は握り拳2つ分より大きく、大変よい芳香があり、上等の食べ物である。根は甘い香りがあり、大変ゴムに似ており、葉によい。

17. 「ピナンゴウ」

[64a] Dit is een groote boom, zyn hout is 't meest in gebruik, by de Javanen om alles van te maken, zyn vrugt zo groot als een duive ey.

ピナンゴウ

大樹にして実の大き鳩卵の如く、其木以て器材に用ゆ。

(蘭文逐語訳)

これは巨木である。その材はジャワ人があらゆる用途に多用している。その実は鳩の卵ぐらいの大きさである。

おわりに

内豎兼主鈴渡邊家文書

『図譜』は宮中役人の内豎兼主鈴を代々勤めた渡邊家の文書・蔵書に含まれていた。内豎は節会など様々な宮中儀式に供奉し、主鈴は武家位記、社家位記などの位階の加級にかかわる文書の請印しょういん（内印「天皇御璽」や外印「太政官印」を捺すこと）を担当した役職である。

渡邊家の文書・蔵書には『図譜』のほかに、享保期から慶応年間に至る代々の親類書・由緒書類、代々受け継がれた内豎兼主鈴の業務日誌、私的日記、さらに役職関係の文書類が大量に含まれていた。『図譜』が渡邊家に伝来した事情の手がかりを求めて、天明7年（1787年、ステュッツェル来日の年）から天

保6年（1836年、辻蘭室の没年）の期間に絞って、これらの史料を調査した。残念ながら、渡邊家における『図譜』伝来を示す証拠史料は発見できなかったが、以下の諸事実を確認した。

渡邊家は内豎兼主鈴という役職柄、多くの公家との往来が認められるが、とりわけ近衛家、武家伝奏の千種家、久我家との関係は注目される。渡邊家は元は近衛家の家来であり、近衛家の取立により内豎にとなったからである⁽²⁷⁾。初代渡邊^{よしなり}珍化は享保14年9月6日に内豎兼主鈴に補せられている⁽²⁸⁾。

天明期に当主「睡竹堂」が作成した所蔵書画の「掛物目録」（渡邊家文書、写本1冊）には、「曼殊院良尚親王御筆 不二西行 探幽一紙兩筆」「狩野永真筆 七福神画」「右同（石川丈山筆）四酔」の3点共通に「元千種家什物故有テ当家江買得、慶応三年丁卯年九月千種大蔵卿江贈遣」との朱書があり、千種家との関係がうかがわれる。朱書は慶応年間の当主渡邊^{よしね}珍鏘の書き入れであろう。「睡竹堂」は天明期の当主渡邊^{よしゆき}珍之（安永3年家督相続）あるいはその子渡邊^{よしか}珍香（寛政12年家督相続、文化15年従四位上加級）の齋号と思われる。幕末に活躍した千種^{ありこと}有功は歌人として名高いが、本草学者山本亡羊と比叡山に出かけ、採薬歌⁽²⁹⁾を即興で作るなど、本草博物趣味を有していた。また、久我家は精華家（七家）のひとつであり、蘭学者辻蘭室が仕えた有力公家である。

渡邊家と典医層との交流も無視できない。荻野元凱（寛政十年従五位下に加級、文化3年没）とその家族、光格天皇に仕えた典医三角有裕典薬允との往来が目立つ。文化5年2月12日の珍香の日記には「荻野^{かたのみや}のテリアカ式匁五分持来ル、珍昌所望致帰ル」と見える。珍昌^{よしあきら}は珍香の養子である。荻野元凱は蘭方に強い関心を寄せ、商館長イサーク・ティチングは離日後も含めて元凱と深い交流を維持していたことが知られている。

珍昌は光格天皇の第八皇子嘉禰宮誕生の際、御用掛をつとめ、詳細な「御降誕私記」長帳1冊（渡邊家文書、「天保四癸巳年二月^{かたのみや}同五年甲午十二月迄」）を残している。

原本の渡来時期

『図譜』の原本、すなわち洋紙に描かれた彩色図はノローニャの自筆本であれ模写本であれ、その渡来はいつであろうか。もっとも早い時期としては、バタヴィアでノローニャと出逢ったステュツェルが来日した1787年と考えられ

る。上述のように、宇田川榕菴が模写した『図譜』の元本は和綴じだったはずであり、部分彩色という模写の特徴から、元本の作成者は晩年にワインマンやドドネウスなど西洋本草書を研究し、ワインマン『花譜』の彩色図から同じ特徴をもつ模写本を作成した小野蘭山である可能性が高い。とすれば、『図譜』原本渡来の下限は小野蘭山の没年、文化7年（1810）となる。

ナポレオン戦争下、1810年、オランダはフランスに併合され、長崎への蘭船入港は文化7年～9年（1810～1812）のあいだ途絶えた。『図譜』原本の長崎渡来時期を1787年～1810年に置くことは現時点で仮説であるが、この時期はティチングのベンガル滞在期（1785～1792）、商館長ファン・レーデ・トット・デ・パルケレルの在日期間（1787～89）、出島医師ステュツェルの在日期間（1787～88）と重なる。

『図譜』の成立時期

『図譜』は宇田川榕菴と辻蘭室の合作であるので、両者の会合は京都で行われたに違いない。榕菴の京都滞在は生涯で一回のみのようだ。幸田正孝氏の労作「宇田川榕菴の年譜」をみると、榕菴は文化15年（文政元年、1818）、藩主の側室を津山まで送る命を受け、5月14日、江戸を発った。帰路は6月12日津山を出立し、京都で蘭学者の藤林普山、典医の小森桃塙に会い、木屋町に僑居したあと、7月5日に江戸の自宅に帰っている⁽³⁰⁾。榕菴、時に21歳。蘭室は63歳であった。当時、和綴じの元本が誰の所有であったか、それを二人がどのようにして元本を入手したのか。『図譜』は、いつ、どのようにして渡邊家の所有となったのか、現時点で確かなことはまだ分からない。

【謝辞】

名雲純一氏は古書の山から貴重な新資料を発掘し、著者らに調査研究の最初の機会を与えて下さいました。フランス国立自然史博物館名誉教授のジョルジュ・メテリエ氏は、ノローニヤのパリ写本について、また香川大学農学部の滝川祐子氏はロンドン写本について、期せずして全く同時に、緊急のお願いをかなえて下さいました。京都大学総合博物館の永益英敏教授、山階鳥類研究所自然誌研究室長の山崎剛史氏のご多忙にもかかわらず、植物分類学、鳥類学の専門知識をご提供いただきました。本学当局には貴重資料の購入に絶大なるご

理解を賜りました。British National History Museum (London, UK)、Muséum national d'histoire naturelle (Paris, France)、京都大学附属図書館、武田科学振興財団杏雨書屋から資料写真掲載の許可をいただきました。

粗雑ながら本稿をまとめるにあたり、ご支援下さいました多くの皆様、関係諸機関に厚く御礼申し上げます。

註

- (1) 益満まを「草創期の京都蘭学—《辻蘭室文書》の書誌的考察—」『日蘭関係史をよみとく 上巻 つなぐ人々』第七章（松方冬子編、臨川書店、2015）参照。
- (2) 対応するオランダ語原文は本稿第4章、2.「ランヂイ」、3.「リンキング」、6.「ラスサマルラ」参照。
- (3) ポンドク・グデー(Pondok Gede)にある村名か。
- (4) 松田清・益満まを・勝盛典子「桂川甫周訳并犀図について」、『京都外国語大学研究論叢 LXXXIII』2014、p.74。Wolfgang Michel, "A Naturalist Lost —C.P. Thunberg's Disciple Johan Arnold Stützer (1763-1821) in the East Indies", *JapanArchiv. Schriftenreihe der Forschungsstelle Modernes Japan*, Band 5, 3. Bonn 2015.
- (5) Marie-Christine Skuncke, *Carl Peter Thunberg, Botanist and Physician: Career-Building across the Oceans in the Eighteenth Century*. Uppsala: Swedish Collegium for Advanced Study, 2014. の著書がある。
- (6) Hoadley, Mason C., & Svanberg, Ingvar, "Hunting the Rhinoceros in Java: Johan Arnold Stützer and his Journal 1786-1787", *SLÅ* 1990-91, p. 123は、ステュツェルの西ジャワ北岸シルボン地方の旅行における、10月12日から25日までの行程を要約しており、ボイテンゾルフ滞在はあり得ない。
- (7) Susana Pinar, *El sueño de las especias : viaje de exploración de Francisco Noroña por las Islas de Filipinas, Java, Mauricio y Madagascar*. Madrid, 2000. pp.87-227に翻刻されたノローニャ『ジャワ島紀行』（De mi viaje a la isla Java.）は3篇からなる。第1篇（Cuaderno 1^o）はノローニャがステュツェルと親交を結び、その案内でバタヴィア博物学界の見聞を広め、バタヴィア学芸協会幹部ヤン・ホーイマンを紹介されその援助を受けた経緯を詳述する。ノローニャはバタヴィアで目撃した日本の文物（酒、極彩色の禽譜）に強い関心を示している。末尾のボゴール、ボイテンゾルフ滞

在記は簡略である。第2篇 (Cuaderno 2°) はポンドク・グデー (Pondok Gede) 以下、各地の滞在記からなる。滞在日数は示すが、日付はほとんど記さない。Rassamalla 樹を観察した1786年10月14日の行動は不明である。第3篇 (Cuaderno 3°) は動物誌で「四足動物」「鳥類」「トカゲ類・ヘビ類」「虫類・海産介類」を記載する。ノローニャはこの紀行のなかでしばしば、自著『植物宝鑑』(Gazophylacio Botanico) に言及しているが、この著作は未詳。

- (8) ロンドン写本およびパリ写本の植物分類学的な先行研究には、C.G.G.J. van Steenis & M.J. van Steenis-Kruseman (1970): "The Plates of Javanese Plants of Francisco Noroña with a revised evaluation of his generic names", *Regn. Veg.* 71, p. 353-380. がある。
- (9) 共同通信の配信によって、日本経済新聞、四国新聞など多数の新聞が報道した。
- (10) 『図譜』はその後、展示「明治150年 神田佐野文庫公開記念 貴重洋学資料にみる絵と言葉—江戸から明治へ—」神田外語大学附属図書館、2018年11月1日~11月16日において、複製の一部とともに展示された。
- (11) 第13丁表の「Banbottak バンボウタック」はサギの幼鳥である。学名は幼鳥のため未詳。山崎剛史氏のご教示による。
- (12) 『大森記念文庫図書目録』(大典記念京都植物園、1937)、p. 19所載「写生植物 (二〇〇植物学二七番) の上巻「写生植物 百貳種」。
- (13) 『杏雨書屋所蔵宇田川榕菴植物学資料の研究』(武田科学振興財団、2014) 所収『榕菴写生植物図譜』図版・解説 (pp. 535-626)、および加藤億重・遠藤正治・幸田正孝・松田 清「V『榕菴写生植物図譜』の研究」(pp. 531-534) 参照。
- (14) 松田 清「杏雨書屋所蔵蘭文写本目録稿 I」『杏雨』第15号、2012年、pp. 89-121 に、「キニーホフ氏植物図譜」の書誌を記載した。
- (15) 第21丁裏の「Cippayit キッパイト」の学名は *Agalmyla parasitica* (Lam.) Kuntze、着生植物であり、図に描かれた木の枝は本種のものではない。マレー半島とジャワ島西部の山地林に分布し、西ジャワでは普通に見られる。林内を歩いていると、鮮やかな赤色の花をつけた姿に出逢う。第22丁表の「Candasoelie カンダスウリイ」の学名は *Hedychium roxburghii* Blume。ショウガ科に属する。いずれも、永益英敏教授のご教示による。
- (16) 詳しい分析は、松田 清「小野蘭山旧蔵ワインマン『花譜』模写図について」(『小野蘭山』八坂書房、2010) pp. (39)-(58). 参照。

- (17) Catalogue général des manuscrits des bibliothèques publiques de France. Paris-Tome II. Muséum d'Histoire naturelle, (...). Paris, Plon, 1914. p. 6.
- (18) C.G.G.J. van Steenis & M.J. van Steenis-Kruseman (1970), pp. 354-356.
- (19) Natural History Museum, London, Library. [Scr/Gallery/ Cupb'd / 113/ Shelf B].
- (20) C.G.G.J. van Steenis & M.J. van Steenis-Kruseman (1970), p. 357.
- (21) C.G.G.J. van Steenis & M.J. van Steenis-Kruseman (1970), p. 360. Noronha, Francisco: Icones ineditae 110 plantarum javanicarum servantur Samarangae in schola navali, Berlin. (ca. 1786-1789. Berlin, Staatsbibliothek zu Libr. Pict. A 101.) Susana Pinar (2000), op. cit. にカラー図版10図が掲載されている。
- (22) 図36、図37は、キユウカンチョウ *Gracula religiosa*。山崎剛史氏のご教示による。
- (23) 図38、図39は、サンショウクイの1種 *Pericrocotus miniatus* のメスカ。山崎剛史氏のご教示による。
- (24) Verh. Batav. Gen. Vol. 5 (1790). "Altingia excelsa Malaice et Javanice Rasamala lignum papuanum Rumphii Herbar. Amboin. Vol. 2. Pag. 57." / "De voortrefelyke Altingia in het Maleisch en Javaansch genaamd Rasamala en by Rumphius in zyn Amboins kruidboek tweede deel bladz: 57 genaamd Lignum Papuanum."
Altingia excelsa Noronha (和名: ラサマラノキ、またはラサマラソゴウコウ) はヒマラヤ、中国南部、インドシナ半島、マレーシア、インドネシアに分布するフウ科 *Altingiaceae* の常緑高木。永益英敏教授のご教示による。なお、*Altingia* の属名はノローニャが当時のオランダ東インド総督 Willem Arnold Alting (1724-1800) に敬意を表して付けた。
- (25) Verh. Batav. Gen. Vol. 5 (1790). "Descriptio arboris Ranghas." / "Beschryving van den boom genaamd Ranghas." 同巻にはまた、*Relatio plantarum javanensium iterfatione usque in Bandom recognitarum à Dno. F. Noronha.* (バンドンに至る旅行により F. ノローニャ師によって発見されたジャワ植物の報告) と題するジャワ植物名彙が収録されている。この植物名彙ではノローニャ提案の新属名リストに続いて、約700種のジャワ植物が二名法による学名とジャワ語現地名との対訳辞典の形で示されている。C.G.G.J. van Steenis & M.J. van Steenis-Kruseman (1970) は「ジャワ島内部に入り熱帯の山岳に登った最初の植物学者」ノローニャの業績として、この「報告」と「ジャワ植物図譜」(ロンドン本、パリ本) を、高く評価している (p. 353)。
- (26) 『図譜』の複製を作成する際に解本した状態で撮影した第8丁。「Ondje ヤンジイ」

はショウガ科の草、*Etlingera elatior* (Jack) R.M.Sm. 永益英敏教授のご教示による。

- (27) 平井誠二『『下橋敬長談話筆記』—翻刻と解題— (三)』『大倉山論集』第48輯、平成14年3月、p.314参照。
- (28) 「御内儀働仕諸家系譜」(渡邊家文書)の渡邊家系譜による。『地下官人伝』第4冊(京都府立京都学・歴史館所蔵 館古458「下橋家資料」No263)の内豎兼主鈴渡邊家伝には享保「十四年後九月五日 補内豎兼主鈴」とある旨、花園大学文学部松田敬之准教授からご教示を受けた。
- (29) 山本読書室資料に「与春斎千種有功卿天台採葉」(R83)、「千種三位有功卿比叡山採葉歌」(M36)などの写本が伝わる。松田清編「山本読書室資料仮目録」統合電子版 <http://matsudakiyoshi.com/dokusho.pdf> 参照。
- (30) 幸田正孝「宇田川榕菴の年譜」『杏雨書屋所蔵宇田川榕菴植物学資料の研究』(2014)、pp. 717-718.